

令和 7 年 5 月 22 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2024

課題番号：20K19172

研究課題名（和文）養護教諭養成段階における自閉スペクトラム症児への対応能力育成に関する研究

研究課題名（英文）Research on fostering the ability to deal with children with autistic spectrum disorder in the training stage of school nurse-teachers (Yogo teachers)

研究代表者

山崎 智子 (Yamasaki, Satoko)

広島大学・医系科学研究科（保）・助教

研究者番号：20512510

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：養護教諭養成段階における、発達障害のある児童生徒への対応能力育成のための教育プログラム開発の基礎資料とするため、養護教諭の対応の構成要素および具体的対応場面をインタビュー調査により明らかにした。養護教諭は様々な場面で、児童生徒の特性や自身の職務を考慮して関わっていた。特性に起因する困り事が軽減するよう支えること、問診と指導を工夫して健康状態を把握すること、学校生活への適応を進めるため個の発達を促すこと、児童生徒が安心して関わられる存在になること、表面化しにくい児童生徒の背景を理解すること、連携して一貫性のある対応をすることなどの支援が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自閉スペクトラム症などの発達に特性をもった児童生徒は、対人関係等社会性の困難さや、成功体験の少なさから自己肯定感が低下し、不安障害や不登校・ひきこもり等の二次障害を引き起こすリスクが高いといわれている。二次障害を防ぐために、教員の適切な対応は重要であるが、教員養成時の特別支援教育は知識伝達型が中心である。本研究の成果である発達に特性をもった児童生徒への養護教諭の支援および具体的対応場面を基礎資料とすることで、対応能力育成のための実践的な教育プログラムの開発につながると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In order to provide basic data for the development of an educational program to foster the ability to respond to Children with Neurodevelopmental Disorders (CNDs) at the school nurse-teacher (SNT) training stage, we conducted an interview survey to clarify the components of a school nurse teacher's response and specific situations in which the teacher responds. Their approaches were summarized into providing support to reduce difficulties associated with Neurodevelopmental Disorders traits, assessing children's health status through effective interviews and guidance, promoting individual children's development and adaptation to school life, becoming a person with whom children feel safe to engage, understanding children's backgrounds that may not be easily apparent, and collaborating to provide consistent support. To support children's health and promote their smooth adaptation to school life, these approaches should be implemented as part of daily SNT work.

研究分野：学校保健

キーワード：養護教諭 発達障害 神経発達症 ASD ADHD シミュレーション教育 グレーゾーン インタビュー

## 1. 研究開始当初の背景

障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律(障害者差別解消法)が2016年に施行され、社会的障壁を取り除くために合理的な配慮の提供義務が定められた。

2022年に実施された日本全国の公立の小学校・中学校の通常学級に在籍する児童生徒のうち、8.8%が特別な支援を要すると報告された<sup>1)</sup>。2012年の調査では6.5%であり、10年間で増加していることが明らかとなった。この調査は、学級担任が記入したものであり、医学的に発達障害のある児童生徒の割合を示すものではないが、特別な教育的支援を必要とする児童生徒数の割合が増加していることが推測される。

障害者差別解消法に対応した、インクルーシブ教育システムの推進により、全教職員に発達障害に関する高い知識や実践力を求められている。教育職員免許法の改正が平成31年4月に施行され、教員養成の教職課程に新たに「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解(1単位以上修得)」が新設された。また、「発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン(文部科学省、平成29年)」では、養護教諭は「特別支援教育の校内体制の中で、児童等の心身の健康課題を把握し、児童等への指導及び保護者への助言を行うなど、重要な役割を担う」とされている。

しかし、発達障害の児童生徒と関わるうえで、小学校の現職養護教諭は、過半数が「実践的対応」に不安を感じており<sup>2)</sup>、養成段階の学生は具体的な支援のあり方など、即時対応しなくてはならない場面を想定した上での実践力をつけていきたい思いが強い<sup>3)</sup>ことが課題となっているが、その具体的な教授方法は明らかとなっていない。これらのことから、発達障害の児童生徒への養護教諭の対応能力の構成要素を体系的・具体的に明らかにし、対応能力育成の教育プログラム開発のための基礎資料とする。

## 2. 研究の目的

養護教諭養成段階における、発達障害のある児童生徒への対応能力育成のための教育プログラム開発の基礎資料とするため、養護教諭の対応の構成要素および具体的な対応場面をインタビュー調査により明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

半構造化面接による質的分析を通じて、発達障害の児童生徒への養護教諭の対応を調査した。養護教諭が発達障害の児童生徒に接する際の具体的な対応に焦点を当てた。

注意欠如多動症(ADHD)や自閉スペクトラム症(ASD)などの発達障害(神経発達症)は、重複していることもあるため、障害名での限定はしなかった。また、日本では小学校入学前までに診断名がはっきりとつくことばかりではなく、グレーゾーンのままの児童生徒もいるため、本研究では、発達障害の疑いを含む特別な支援を要する児童生徒を“発達障害の児童生徒”と表記する。

インタビューへの参加者は、小学校や中学校での勤務歴が15年以上の養護教諭である。発達障害の児童生徒への対応経験が十分に蓄積された経験年数の多い者に参加者を限定した。A県とB県の養護教諭から、スノーボール方式で参加者を募集した。参加は、データが飽和するまで募集した。

半構造化インタビューは、2023年4月から2023年8月に対面やオンラインで7名の養護教諭に実施された。インタビューの前に、研究の目的と方法、自発的な参加、秘密保持に関して、口頭と文書を使って参加者に説明し、同意を得た。インタビューガイドは、養護教諭が対応した場面、意図、具体的な対応方法を引き出すような方法で作成された。パイロットインタビューを実施し、インタビューガイドが適切であることが確認されてから、研究が実施された。インタビューは、プライベートが確保された静かな部屋やオンラインで行われ、参加者の許可を得て音声録音された。インタビューは35分~67分で、中央値は52分であった。インタビューは主題が飽和するまで継続された。

音声録音は、個人情報削除してそのまま文字に書き起こして逐語録を作成し、質的内容分析を実施した。2人の研究者が各インタビューを独立してコーディングした。意味内容を凝縮してコードが作成された。相違点と類似点に基づいて様々なコードを比較し、意味のまとまりごとにサブカテゴリー、カテゴリーを特定した。コンセンサスに達するまで、研究グループ内で議論がなされ、繰り返し検討された。コーディングの最後に、結果の信頼性を高めるため、追加のメンバーチェックが実施された。カテゴリーとサブカテゴリーは勤務歴15年以上の養護教諭1名と、質的研究の経験豊富な研究者1名によって再検討され、そのフィードバックに基づいて改良された。

## 4. 研究成果

インタビュー調査の結果、養護教諭は、子どもの特性や自身の職務を考慮しながら、様々な場面で発達に特性をもった児童生徒と関わっていることが明らかとなった。内容分析の結果、266のコードから、23個のサブカテゴリー、6個のカテゴリーが抽出された(表1)。カテゴリーを

【 1】 サブカテゴリーを< >、で記載する。

表 1. 発達障害の児童生徒への養護教諭の支援

カテゴリー (6個)	サブカテゴリー (23個)
特性に起因する困り事が軽減するよう支える	感覚過敏のある児童生徒のために環境を整える
	児童生徒がスムーズに活動できるよう工夫する
	児童生徒がパニックを起こした時にクールダウンを促進する
問診と指導を工夫して健康状態を把握する	事前に健康診断の受け方を体験型で指導する
	主訴を表現しやすい問診の方法を選択する
	児童生徒が納得できるよう説明を工夫する
学校生活への適応を進めるため個の発達を促す	ソーシャルスキルの向上を意識して関わる
	他の児童生徒との関係づくりを促進する
	一定のルールを設けたうえで合理的配慮をする
児童生徒が安心して関わられる存在になる	児童生徒の自己肯定感を高める関わりをする
	児童生徒の身近な存在になるよう意識して行動する
	児童生徒の信頼感を損なわないように誠実に対応する
	先入観を持たずに、児童生徒の辛さに受容的に共感的理解をする 安心させる働きかけをする
表面化しにくい児童生徒の背景を理解する	継続的な支援につなげる
	状況や行動を観察して異変に気付く
	児童生徒の想いを汲み、本心を引き出す
連携して一貫性のある対応をする	積極的に情報を得て児童生徒の理解に努める
	情報を教職員と共有する
	対応方針について多職種と検討する
	教職員で共通認識を持ったうえで一貫性のある対応をする 保護者と普段から情報共有して連携できる関係をつくっておく 特性や困り事に応じて専門家につなげる

#### カテゴリー1.【特性に起因する困り事が軽減するよう支える】

発達障害の児童生徒の中には、においや光などに敏感で、保健室の中の消毒液のにおいなどを不快に感じることもあるため、換気をしたり、光に過敏な場合には、照明が明るすぎない場所を提供したり、環境を整えていた。作業や思考の切り替えがスムーズにいくように、声かけを工夫するなど活動に支障が出ないように配慮をしていた。同時並行処理が苦手な特性を持つ児童生徒もいるため、マルチタスクにならないように、端的に指示を出すなどスムーズに活動できるよう工夫していた。児童生徒がパニックを起こした時には、落ち着くまで見守り、危険がないように物品を移動させるなどクールダウンしやすいよう支援していた。

#### カテゴリー2.【問診と指導を工夫して健康状態を把握する】

健康診断の受け方の事前指導に動画などの視覚資料を用いたり、本番と同じ場所および器具を用いて健康診断のロールプレイをさせたりすることで、初めてのことが苦手な児童生徒がスムーズに受けられるようにしていた。また、救急処置の際には、言葉で話しても伝わりにくい児童生徒には、一緒に絵を描きながら状況確認をするなど言語以外のコミュニケーション方法も模索しながら、児童生徒が主訴を訴えやすいように問診を工夫していた。比喩や例え話をする際は、言葉通りに受け取る特性を考慮したり、視覚資料を用いたり特性に合わせて児童生徒が納得できるような説明をしていた。

#### カテゴリー3.【学校生活への適応を進めるため児童生徒の発達を促す】

保健室でのやりとりを通じて、他の子どもとの関係づくりを促進するとともに、言語による表現力向上を意識して関わったり、社会規範と暗黙の了解を理解する手助けをしたり、児童生徒のソーシャルスキルの向上のための支援をしていた。また、目標は子ども自身に決めさせ、結果をすぐに求めずに段階的に指導をし、過程を含めて認めて褒めると共に、児童生徒の良い所を本人に自覚させるなど、自己肯定感を高めることを意識して関わっていた。さらに、合理的配慮をする際にも、児童生徒のプライドを傷つけないよう工夫をしていた。

#### カテゴリー4.【児童生徒が安心して関わられる存在になる】

初めての事やなじみのない人が苦手な児童生徒のために養護教諭は普段からコミュニケーションをとったり、話しかけやすい雰囲気づくりをしたりすることで、不安感のある児童生徒の身近な存在になることを意識していた。一度認識したことを覆すのが難しい児童生徒もいるので、最初の出会いを大切にすると共に、約束を守ったり、正直でいたりするなど、信頼感を損なわないように誠実に対応していた。また、児童生徒と接する際には先入観を持たずに、児童生徒の辛さに対して受容的に共感的理解を示すとともに、安心させる働きかけをしていた。

#### カテゴリー5.【表面化しにくい児童生徒の背景を理解する】

主訴を表現するのが苦手な児童生徒もいるため、状況や行動を観察して異変に気付くことを心がけていた。感覚鈍麻がある児童生徒は、痛みを実際より低く感じることもあるので、アセスメントの際に痛みの程度を慎重に判断していた。また、養護教諭は、児童生徒が問題のある行動をした際に、その行動にも何か意味があると認識していた。本音を言葉にして言えない児童生徒もいるので、その想いを汲み、本心を引き出そうとしていた。さらに、養護教諭は、申し送りの

資料を読んだり、研修に参加したりして、積極的に情報得て児童生徒の理解に努めていた。

カテゴリー6.【連携して一貫性のある対応をする】

6つめのカテゴリーでは、<情報を教職員と共有>し、<対応方針について多職種と検討>し、<教職員で共通認識を持ったうえで一貫性のある対応をする>という連携のプロセスが明らかとなった。チームで検討した上で、<必要に応じて専門家につなげる>を実施していた。また、<保護者と普段から情報共有して連携できる関係を構築している>ことが示された。何か問題が起こってから連携するのではなく、日ごろからコミュニケーションをとって関係性をつくっておくことで、保護者も頼りやすくなると考えられる。保護者との情報共有の中で、家庭での様子を聴いて【児童生徒の背景を理解する】ことにもつながる。児童生徒の円滑な学校生活を支えるには、養護教諭がひとりで問題を抱え込むのではなく、教職員間や保護者・専門家で情報を共有し、対応方針について多職種で多角的に検討した後、共通認識を持ったうえで、連携して一貫性のある対応が必要である。

全てのカテゴリーで、児童生徒の特性に応じた対応をしていることが、養護教諭の語りから明らかとなった。これらのアプローチは、児童生徒の健康をサポートし、生活の質を向上させるために、日常的な養護教諭の実践に組み込まれることが必要であると考えられる。

本研究で明らかになった養護教諭の支援を、養護教諭養成機関での教育内容に取り入れることで実践的に学べ、学生が卒業後就職して働く際に困難感の軽減につながると考えられる。また、世界でもASDやADHDの子どもは増加傾向にあるため、本研究で明らかになった日本の養護教諭の対応を、医療現場や養護教諭の制度がない国のスクールナースにも取り入れることで、発達障害の子どもへの支援の向上につながると考えられる。

今後の課題としては、本研究で得られた養護教諭の支援の内容は、個人の経験にも影響されるため、全国規模で質問紙調査による量的研究を実施する必要があると考えられる。

<引用文献>

1. 文部科学省. 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査.2022. [https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf)
2. 大谷 育美 他:小・中学校の特別支援教育における養護教諭の活動実態と役割.発達障害研究.2011.
3. 石山貴章:養護教諭を目指す大学生の特別支援教育に関する学びの意識.佐賀大学教育学部研究論文集.2016.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Satoko Yamasaki, Hiromi Kawasaki	4. 巻 16
2. 論文標題 Support for Children With Neurodevelopmental Disorders: A Qualitative Study Based on Interviews With School Nurse-Teachers	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 CUREUS JOURNAL OF MEDICAL SCIENCE	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7759/cureus.74369	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Satoko Yamasaki, Hiromi Kawasaki, Mari Murakami, Sae Nakaoka, Misaki Shiraishi
2. 発表標題 Approach for Children with Neurodevelopmental Disorders: a Qualitative Study Focusing on the Recognition and Support of School Nurse-Teachers
3. 学会等名 28th East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）
4. 発表年 2025年

1. 発表者名 Satoko Yamasaki, Hiromi Kawasaki, Sae Nakaoka, Misaki Shiraishi, Yuan Li, Nanami Funaki
2. 発表標題 Enhancing SDG4: Japanese School Nurse-Teachers Contribution through Individual Support for Children with Neurodevelopmental Disorders in Group Education
3. 学会等名 27th East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------